



ヘルムート・キュンネ氏

キュンネ氏は、ドイツ・ジューゲン大学のリビングラボで、プロジェクトの初期段階から参加しています。彼はすでにいくつかの機器をテストし、プロジェクトの研究面でさまざまなインタビューに応じ、高齢者が自宅でこれらの新しい技術を利用する際の障害や課題について、意見を述べています。

Question 01 高齢者が家庭でデジタル技術を利用する際の障壁は何だと思われますか？

私自身の経験から、高齢者の方は新しい技術に対してオープンであると思います。メディアでも、日常生活でテクノロジーを活用する方法がたくさんあることを耳にしますが、自分が正しいソリューションを買っているのかどうか、誰がそのような機器の設置を手伝ってくれるのか、どのように使い方を学べばいいのか、わからないことが多いです。

しかし、もっと大きな問題は、この年齢層の人たちにより多くアプローチし、このトピックに興味を持ってもらうことです。そのためには、政治、社会、産業界のキーパーソンがネットワークを組み、新しいコンセプトを打ち出していかなければなりません。その意味で、e-VITAはこの目標を達成するための非常に有望なアプローチだと考えています。



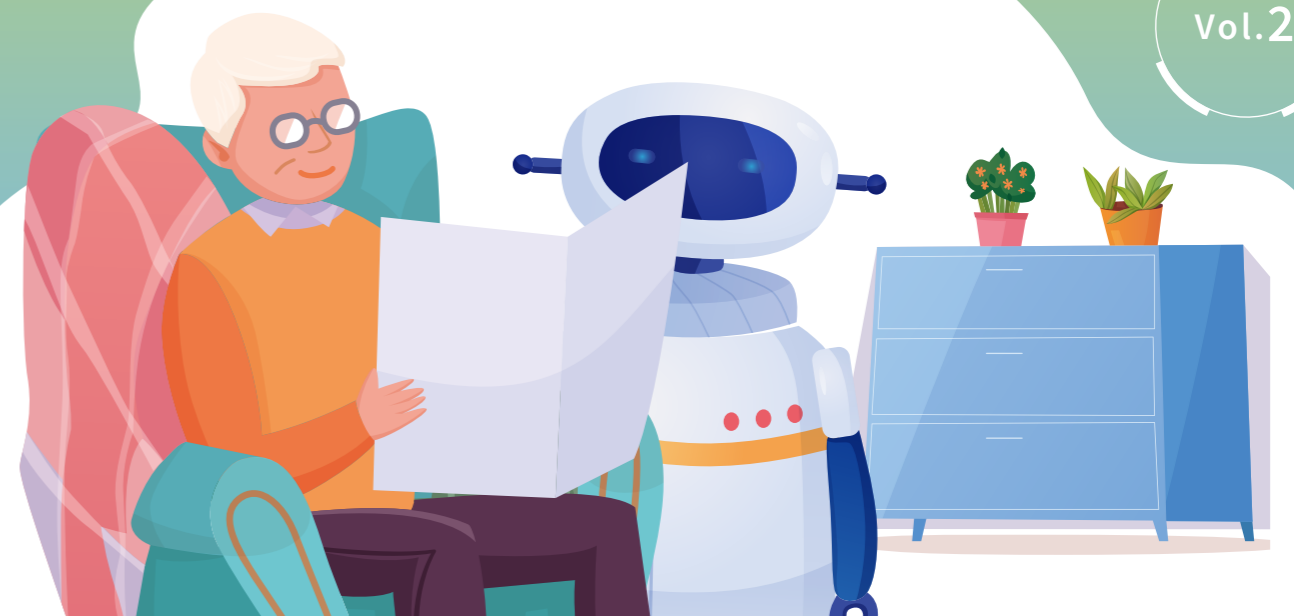
Question 02 最新テクノロジーを備えていますか？ 備えているとしたら、どのテクノロジーを使っていますか？

私はPC、タブレットPC、携帯電話、スマートウォッチ、すべて無線LANに接続しています。スマートウォッチで健康や気象のデータを取得したり、タブレットPCでテレビを見たり、ロボット芝刈り機などの電気機器を遠隔操作・監視するなど、デバイスを越えたデータ交換やサービスを越えたコミュニケーションが日常生活の一部になっています。

Question 03 e-VITAの最初の活動に参加されて、どのようなことを感じられましたか？ プロジェクトに期待することは何ですか？

e-VITAプロジェクトについては、定年退職者である私が国際的な研究プロジェクトに積極的に参加する機会を与えられるということに興味を覚えました。また、車いすユーザーである私は、生活環境における行動範囲が大きく制限されているため、テスターやインタビューパートナーとしてプロジェクトに直接参加できることも魅力的でした。

e-VITAの多角的なプロジェクトアプローチは、一方では技術的または仮想的なサポートによって生活環境での生活の質を高め、他方では共同体や近隣概念という形で新たに提供されるものを通じて、世界や他のコミュニティとのコミュニケーションの機会、レジャー、趣味、教育にも参加することを可能にしてくれます。また、Gatebox、NeUのBrainmeter、Oura Ring、NETATMOなど、普段は接することのない全く新しいデバイスを科学的なサポートとともに長期的に試すことができるのも、私にとって大きな魅力です。



01

シニアの希望を叶える バーチャルコーチ！



Gateboxを
使用するユーザー

●Wave1試験

e-VITAプロジェクトではEUとともに、シニアがいつまでも自分らしい日常生活が送れるようサポートする仮想コーチの開発と人間コーチの確立を目指し2021年より開始しました。本プロジェクトは技術者だけではなく、ユーザーも開発者として捉えられ、ユーザーと一緒に仮想コーチを作ることを目的としています。仮想コーチングシステムでは、アドバイスやリマインドを行うだけではなく、日常生活にマッチした会話をはじめ個々に寄り添い、自律した生活の継続をサポートします。

昨年度実施されたユーザーのニーズ調査の結果をもとに試作品を作り、バーチャルコーチ実現可能性の評価と人間コーチの在り方を検討することを目的とした「WAVE1試験」が行われました。日本では研究に参加するユーザーの自宅にe-VITAシステムを搭載したgateboxを2-3週間設置しました。依存度、受容性、有用性、ユーザー経験および被験者の幸福度と生活の質への影響を調査する他、センサーやスマートリング(OuraRing)、脳計測装置(NeU ExBrain)などのウェアラブルデバイスも使用しました。

参加者は、スマートフォンを通じて”人間コーチ”と対話し、専用に作成したスマートフォンアプリを使ってウェアラブルデバイスのデータにアクセスしたり、地域のニュースやイベントを紹介するコミュニティソーシャルネットワークサービスを見たりしました。他にも、e-VITAシステムのキャラクターと日常生活について話したり、ニュースや天気などの情報を聞いたり、インターネット検索をすることもできました。

ご参加いただいたユーザーから多くのアイデアやコメントをいただきました。今回システムが確定されたことで、今後半年間リビングラボを通じて、研究者とシニアが密接に連携し、対話の内容をより充実させていく予定です。



●人間コーチの役割

人間コーチとは、ICTやロボットを活用したバーチャルコーチとともに、アクティブヘルシーエイジングのサポートと行動変容をサポートするコーチングを行うことを目的とした人間の支援員です。現在、人間コーチの組織化も試みており、コーチの在り方についてもユーザーから意見をいただきながら進めているところです。Wave1試験中、人間コーチは定期的に電話にてユーザーに困りごとないかを確認するなどのサポートを行いました。また、テストセンター(大学)での報告会にて、人間コーチがディスカッションを行い、成果や問題点の共有をしました。



実際にご協力していただきました人間コーチの声

コーチ

話を聴くことや指導経験はあるので、プロジェクト初めてのことであったが面白かった。生き甲斐や、自信、満足感が得られたことや、初めての方とも話ができたことは良かった。自分なりに、貢献度にもつながり良かった。果たして役に立てたかは疑問ではあるが大変貴重な経験をさせていただいたことを感謝している。



コーチ

シニアの特性を理解し、経験と蓄積を活かしコーチングできたことは自信になった。だが、もう少しユーザーさんをやる気にさせたかった反省点として悔いが残る。貢献度もそこそこある。社会に貢献できている、こういう場を与えてもらっている、それが報酬でもあり、この知恵(経験)を使うことの満足感と自信につながり確信ができた。

コーチ

ユーザーから、このプロジェクトの目指すことに対する採点結果は辛口採点であったが、プロジェクト成功への期待をこめて0点ということで今後が楽しみ。意気込んでやったわけではなく、いかに上手くコミュニケーションが取れるかにポイントをおいていたので自分は満足!100点!自信を持って行えた、自分はユーザーに恵まれた。ユーザーとのフィーリングが大事ととても感じた。貢献度も101%満足している。当初のイメージ通りだった。



6月上旬、イヴ・ジェリー氏とアシスタントのファビアン・デュシャン氏を仙台にお迎えしました。

ジェリー氏は「The Year of the Robot」という作品で広く知られています。e-VITAプロジェクトのPRビデオ制作を手伝ってくれることとなり、東北大学のスタッフと協力して、リビングラボや自宅でロボットと触れ合う高齢者の姿を撮影しました。

その後、東京に移動し、産総研、早稲田大学、桜美林大学と協力して、さらに多くのビデオを作成しました。どこで見られるかは後ほどお知らせ致しますので、どうか楽しみにお待ちください。



e-VITAプロジェクトの中間発表会が7月14日、15日に産総研主催で開催されました。オンラインでの開催で、参加者は165名にのびりました。欧州と日本から招待講演者が集まり、主なトピックは、AIの基礎、ICTと高齢者の福祉との相互作用および政策の視点、に及びました。講演者の多くはコンソーシアム外からの参加者やアドバイザーボードのメンバーであり、スマート・エイジングのための技術について様々な意見を聞くことができ、この後の1年半のプロジェクトの成功に直結する素晴らしい機会となりました。



【東北大学リビングラボからみなさまへ】



富士通Japan株式会社 様が見学

東北大学リビングラボでは、外部組織とのコラボレーションを歓迎しています。私たちは常に、地元企業や国内企業のニーズを満たす方法を探しています。私たちの優れた研究によって支えられた企業は、高齢者のニーズを満たす新しい製品、サービス、方法論を提供し、スマート・エイジングを実現する手助けをします。

私たちは、仙台市内に住む多くの高齢者に簡単にアクセスでき、そのうちの何人かと親密な関係を築いてきました。このような高齢者の方々と容易にコンタクトを取り、フィードバックセッションやフォーカスグループ、インタビューなどを実施することが可能です。もちろん、e-VITAプロジェクトの一環として、より長期的な調査活動も行っています。

ご興味のある方は、ぜひご連絡ください。
リビングラボへのご来訪はいつでも歓迎いたします。